四季録

庭と自然

日本にはこんなに美しい自然があるのに、なぜ家の中にさらに庭を造るのか、と言ったイギリス人がいる。庭のことではないが、僕にも思うところがある。

たとえば、場所を選ばずほのぼのとした山里や海辺の公道沿いに、唐突にも見える園芸花を列をなして植えたり、野の広いスペースを自生ではない一種の花で覆いつくしたりして、人工的景色を造る。新聞やテレビは、そこに集まる家族連れなどのうれしそうな光景をよく取り挙げる。きれいはきれいなのだろうし、楽しむ人や懸命に咲かせている人たちにとっては潤いなのだろう。

ただ僕は足が向かない。自然は自然のままに、できるだけそっとしておいてほしいと思ってしまう。特に飾らずとも、現にある風景の中にいくらでも豊かに見えてくるものはある。

家の庭はまた少し違う。好きな植物を植え、石を置き、水を張る。個がつくりだす暮らしの中のちっぽけな自然。曇りがちな目を開いてくれる、常に発見のある自分だけの小宇宙と言ってもいい。

画材を扱う生家は、商店が密集する街中では珍しく奥に20坪程の庭がある。現在住む家から近く、毎日のように立ち寄って目を配り、移ろう季節に応じて手を入れる。草いきれ、枯れ葉や土の匂い、芽吹きや咲く花のみならず、張り付くコケや雑草の勢力争いまで、一年中味わいに満ちている。生きるものに触れば触るほど愛着が増し、気に入りの空間となってゆく。

ある時期、体力的に管理が難しくなった大きすぎる木を、頭を下げ何本も伐った。木を伐るのは辛い。父がコイを飼っていた池は埋め、自分で小さな池を作り

メダカを入れた。光る水面に寄ってくるトンボは僕にちょっかいを出し、白髪頭の上にフィッと留まる。

網を張り我慢強く獲物を待つクモ。からかうと鎌を上げて威嚇してくるカマキリ。テントウムシは小さく身を潜め、カナブンが大きな羽音を立てて耳元を横切る。忽然と現れるアメンボ。死骸を運ぶアリ。穴を掘ればミミズがいるし、花が咲けばチョウもハチも来る。池の中にはヤゴ、草の影にはダンゴムシ。セミの抜け殻も驚く数。カタツムリ、ナメクジ、バッタは葉を食い荒らす厄介者だが、怒る気持ちは起きず、植物もまた鷹揚に受け入れているかのよう。ヤマバトやヒヨドリ、メジロやホオジロなどの鳥もやってくる。ひたすらなものたち。狭い庭にも連鎖する生が溢れている。

今日も庭に行く。深く息を吸い、たたずみ、見詰める。時間の流れを見せてくれる植物。エネルギーを伝えてくれる虫や鳥。濃い静けさを与えてくれる石。たいせつなものがここにある。

（吉田　淳治・画家）

愛媛新聞 :朝刊 2020/06/07 面名:文化 ページ:016
(C) 愛媛新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。